

## マレー文化圏における断り表現の比較

ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の発話の順序に関して

伊 藤 恵美子\*

### The Comparison of Refusals to Invitations in Malay Cultural Sphere:

On the Order of Utterances of the Javanese, the Indonesian,  
and the Malaysian Languages

ITO Emiko\*

#### Abstract

This paper investigates refusals to invitations by Javanese, Indonesian, and Malaysian speakers in Malay cultural sphere. The data based on DCT (Discourse Completion Test) were collected from 134 informants: 33 Javanese speakers, 33 Indonesian speakers, and 68 Malaysian speakers. This paper is considered to be a part of eleven cross-cultural surveys (Ito 2001a; 2001b; 2002a; 2002b; 2003a; 2003b; 2004a; 2004b; 2004c; 2005). The paper is divided into five sections. The first section reviews papers on cross-cultural pragmatics. The second section presents politeness theory (Brown & Levinson 1987), which is the framework of the surveys. The third section outlines experimental design, such as informant population, their background, research period, method, procedure, and measurement scales. The fourth section is devoted to the discussion. The final section concludes the findings.

#### はじめに

本稿は、マレー文化圏<sup>1</sup>において発話行為 (speech act) の調査・分析を実証的に行った研究 (伊藤2001a; 2001b; 2002a; 2002b; 2003a; 2003b; 2004a; 2004b; 2004c; 2005) を踏まえ、インドネシア人のインドネシア語<sup>2</sup>・ジャワ語とマレーシア人のマレーシア語に見られる断り表現の比較を行う。

本稿は、第一段階で母語 (マレーシア人のマレーシア語・インドネシア人のジャワ語・インドネシア人のインドネシア語) 別に分析を行い、第二段階でマレーシア語・ジャワ語・インドネシア語を比較し、第三

段階でマレー文化圏における言語文化の普遍性を探ろう、とする研究計画の一環である。マレーシア人を対象とした論文はすでに数本発表しており (伊藤2001a; 2001b; 2002a; 2002b; 2003a; 2003b; 2004a; 2004b) 今年度よりインドネシア人を対象にしたジャワ語とインドネシア語の分析を開始した (伊藤2004c; 2005)。この研究計画の第二段階として、本稿はインドネシア人のジャワ語・インドネシア語とマレーシア人のマレーシア語を対象に、勧誘行為に対する断りを発話の順序に絞って分析するものである<sup>3</sup>。

本稿は、発話行為の見地から複数の言語文化を比較する比較文化語用論 (cross-cul-

\* 名古屋大学大学院国際開発研究科研究生

tural pragmatics) に属する。比較文化語用論の先駆的な研究としては、Blum-Kulka & Olshtain (1984) がオーストラリア英語・アメリカ英語・イギリス英語・カナダ仏語・デンマーク語・ドイツ語・ヘブライ語・ロシア語の 8 言語を比較した CCSARP (Requests and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns) が挙げられよう。アジアの言語を対象とした先行研究としては、Blum-Kulka & Olshtain (1984) の枠組みを用いて印欧語と東洋系言語を比較した橋元 (1992)、留学生 (マレーシア語・中国語・インドネシア語・ビジン語・インドネシア語・韓国語の母語話者) の談話行動上の問題点を指摘した熊井 (1992)、橋元 (1992) のデータを再分析した笹川 (1994)、日本人・アメリカ人・マレーシア人・フィリピン人を異文化コミュニケーションの視点から比較した Niikura (1999)、日本語とマレーシア語の断り行為を比較した伊藤 (2001a; 2002b; 2003a; 2003b; 2004b)、日本語と韓国語の断り談話におけるストラテジーを分析した任 (2004)、日本語・ジャワ語・インドネシア語のストラテジーを比較した伊藤 (2004c; 2005) などがある。

本稿はジャワ語・インドネシア語・マレーシア語のストラテジー使用を主に考察するので、母語別の比較を行っていない研究 (熊井1992) とストラテジーの観点から考察を行っていない研究 (伊藤2003a; 2003b; 2004b; 2004c) は除き、インドネシア語を分析した橋元 (1992) と笹川 (1994)、マレーシア語を分析した伊藤 (2001a; 2002b)、ジャワ語・インドネシア語を分析した伊藤 (2005) について、以下に述べる。

橋元 (1992) は、Blum-Kulka & Olshtain (1984) の CCSARP を基に、日本語・中国語・韓国語・タイ語・インドネシア語・英語・ドイツ語・ポルトガル語・ブルガリア語の 9 言語の依頼行為を 6 場面で調査・分析した。その結果、中国語以外の東洋系言語 (日本語・韓国語・インドネシア語・タイ語) では社会的地位の高低によって、欧米の言語 (ブルガリア語・英語・ドイツ語・ポルトガル語) では親疎関係によって、ストラテジーの使い分けが行われやすい、と橋元 (1992) は論じている。笹川 (1994) は依頼に対する断り行為を分析し、他の 8 言語では見られない「言えない」というストラテジーが、インドネシア語には見られたことから、断り行為は断る側の心理的負担が強いと考察している。伊藤 (2001a) は、勧誘行為を断る際に相手の地位・相手との親疎関係に関わらず、日本語母語話者とマレーシア語母語話者は、勧誘してくれた相手に対して同程度に心理的負担を感じることを統計的に分析した。伊藤 (2002b) は、勧誘行為を断る場合、日本語もマレーシア語も詫びを言ってから理由を話す傾向があることを見出した。伊藤 (2005) は、勧誘行為に対する断りにおいて、ジャワ語は相手の地位や相手との親疎関係に関わらず発話が理由で終わるのに対して、インドネシア語は目上の疎遠な相手に対しては詫び、目上の親しい相手・同等の相手に対しては発話が理由で終了することを見出した。

また、日本人学習者の英語を日本語母語話者・アメリカ人英語母語話者の断り行為と比べた Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) は、学習者の発話行為を分析しているので、比較文化語用論というより中間言

語語用論 (interlanguage pragmatics)<sup>4</sup>に属するであろうが、本稿はBeebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) の調査デザインを参考にしたので、先行研究に入れることにする。Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) は、分析の結果、日本語の断り行為は英語に比べて代替案の提示が特性であると述べている。

## ・本稿の位置づけ

### 1. 理論的背景

本稿の理論的枠組みは、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論 (politeness theory) である。ポライトネス<sup>5</sup>は、日本語やジャワ語や朝鮮語などが有している丁寧さの言語体系、いわゆる敬語より広い概念であり、宇佐美 (2001) では、円滑な人間関係を確立したり維持したりする際に機能する言語的ストラテジーをポライトネスと定義している (宇佐美2001: 10)。

ポライトネス理論で中核を成す概念は、FTA (Face Threatening Act) である。人間には、他人に理解や称賛をされたいポジティブ・フェイス<sup>6</sup>と、他人に邪魔されたくないネガティブ・フェイスの二つのフェイスを保ちたい欲求があるとされている。ポジティブ・フェイスに働きかけるストラテジーをポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・フェイスを尊重するストラテジーを

ネガティブ・ポライトネスと言う。このフェイスのどちらか一方、あるいは両方を脅かすような行為をFTAと呼ぶ。FTAは、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかかる負担の度合の和で表され、負担の度合は文化によって異なるとされている (Brown & Levinson1987)。

### 2. 研究目的

本稿は、勧誘に対する断り行為のみを分析対象とする。対話の相手と勧誘される状況は、表1のとおりである。場面設定に関して、Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) などでは「高級レストランで賄賂を贈られる」「従業員から昇給を要求されている」等の職場の場面が提示されているが、これらの状況は調査対象者である大学生にとってあまり現実的とは言えないので、本稿は表1のように状況を改めた。

本稿の研究目的は、先に述べたポライトネス理論を枠組みに、話し手と聞き手の社会的距離を「親疎関係」として、話し手と聞き手の力関係を「地位」として、相手にかかる負担の度合をジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の「文化差」として、それぞれの母語話者の言語表現をストラテジー使用の観点から比較することである。

表1 場面設定

場面	対話の相手	状況
1	担任の先生	パーティに誘われる
2	担当以外の先生 <sup>7</sup>	パーティに誘われる
3	親しい友達	散歩に誘われる
4	親しくない学生	散歩に誘われる

## ．調査

### 1．調査対象者

調査は、インドネシア共和国（以下、インドネシアとする）とマレーシア連邦（以下、マレーシアとする）で行った。回収した回答は、インドネシアで80名、マレーシアで80名であった。有効回答は、回収した調査紙のフェイス・シートの母語および宗教欄を参考に、インドネシアの調査ではジャワ語母語話者とインドネシア語母語話者、マレーシアの調査ではマレーシア語母語話

者に限定した。有効回答数は、表2のとおりである。

インドネシアで収集したデータを母語別に分け、ジャワ語とインドネシア語の母語話者のみを有効回答にした理由は、前者が日本語以上に複雑な敬語体系を有するのに対して後者には敬語がないので（崎山1974）両言語の母語話者が持つ丁寧さに関する意識は異なるのではないかと考えられるからである（伊藤2005）。

表2 回答の言語別内訳

対象者	母語	調査国	回答数
インドネシア人	ジャワ語	インドネシア	33
インドネシア人	インドネシア語	インドネシア	33
マレーシア人	マレーシア語	マレーシア	68

### 2．調査期間

調査はインドネシアでは1999年8月下旬、マレーシアでは同年8月下旬から9月にかけて実施した。

### 3．実施方法

調査は、インドネシア語版とマレーシア語版の調査紙を用いて実施した。インドネシアでの調査は、筆者がジャワ島中部にあるディポネゴロ大学（Universitas Diponegoro）を訪問し、アセアン学生協会の協力を得て、同大学の学生に対してインドネシア語版の調査紙を直接、配布・回収した。マレーシアでの調査は、筆者がマラヤ大学

の日本留学予備教育課程日本語科（Ambang Asuhan Jepun, Pusat Asasi Sains, Universiti Malaya）を訪問して調査を依頼し、1年次の在籍者全員に対してクラス担任が授業時間内にマレーシア語版の調査紙を配布・回収した。

### 4．手続き

調査紙は、談話完成テスト（Discourse Completion Test: DCT）<sup>8</sup>とフェイス・シートから構成され、DCTは場面設定と会話の相手の台詞と、それに対する応答を書き入れる空白欄で構成されている。[例1]は、日本語版DCTの《場面1》の設問である。

[例1] 担任の先生がパーティに招待してくださいました。しかし、その日は友達の結婚式に出席します。

先生：今週の土曜日に私の家でパーティをするので、よかったら来ませんか。

私：\_\_\_\_\_

## 5 . 分析方法

まず、インドネシア語版とマレーシア語版のDCTはそれぞれの言語を母語とする留学生各2名の意見を参考にして、日本語に訳した。次に、発話内容の分析はDCTで得た発話から意味公式 (semantic formulas) を抽出した後で、その意味公式を機能別に分類した。

意味公式は、Blum-Kulka & Olshtain (1984)、Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990)、生駒・志村 (1993) などで、発話の分析に使用されている意味的なまとまり

の単位であり、「発話行為を分析する際の単位」と定義される (藤森1994: 5)。なお、意味公式は { } で表示する。

本稿は、伊藤 (2004a) の分類に従う。これは、(1) 断り行為の代表的な先行研究であるBeebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) の分類、(2) Beebe, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) を日本語の分析に導入した藤森 (1994) (3) 藤森 (1994) を修正してマレー語を分析した伊藤 (2004a) を踏まえている。表3が、発話の代表的な例とその意味公式の一覧である。

表3 断り行為における意味公式の分類

意味公式	意 味 機 能	例
{ 結論 }	直接的な表現の断り	行けない/無理です/できない
{ 理由 }	相手の意向に添えない旨の表明	定期試験があるので
{ 詫び }	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	申し訳ありません/ごめんね/勘弁して/おこらないで
{ 関係維持 }	相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけ	次回は行きます/また今度ね/次は出席します
{ 共感 }	相手の意向に添いたい心情の表明	行きたいけど/残念ですが/したくないことはないけど
{ 感謝 }	相手の行為により恩恵を受けたことの表明	ありがとうございます/ありがたいんですが
{ 情報 }	相手の発話内容を確認	今からですか/何時から?/明日まで?
{ 条件 }	断りの留保 <sup>9</sup>	時間があれば行きます/ レポートを書いてからやります
{ 承諾 }	明確な承諾	行きます/やります/わかりました
{ その他 }	上記に該当しないもの	ちょっと.../あう.../えーと

[ 例2 ] 担任の先生がパーティに招待してくださいました。しかし、その日は友達の結婚式に出席します。

先生：今週の土曜日にパーティをするので、よかったですら来ませんか。

私：すみません。今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならなくて、本当にすみません。

[例2]は、場面1の日本語における回答例である。「今週の土曜日にパーティをするので、よかったら来ませんか」が、調査紙に印刷されている誘いである。対話の相手からの誘いに対して、ある調査対象者は「すみません。今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならず、本当にすみません」と回答を記入した。回答は、「すみません」が詫び、「今週の土曜日は私の友達の結婚式に出席しなければならず」と理由、「本当にすみません」が詫びの意味機能を担っているため、3つの意味公式{詫び}{理由}{詫び}に分類される。

### 結果と考察

本稿では発話を意味公式で捉え、その順序に注目し、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の特徴を見出していく。勧誘行為に対する返答のうち断り行為を中心に、三言語の異同を、対話の相手の地位別、および対話の相手との親疎関係別で検討する。

ポライトネス理論によれば、すべての発

話行為が対話の相手にとってFTAとなり得るが、断り行為は特に相手のフェイスを脅かすので(笹川1994)断りを行おうとする際に様々なストラテジーが必要となる(伊藤2002b)。例えば、相手の意に添えない場合、話をどう終えようかと苦慮することがあるが、それは最後の一言で対人関係の不均衡を修復しようとするために、十分な配慮が必要だと感じるからである。そこで、本稿は伊藤(2002b; 2004b; 2005)を踏襲して、意味公式の順序だけでなく、一連の応答の最後に来る意味公式も検討の対象とする。以下、場面ごとに、最頻出の応答の順序とその割合、応答の最後に来る最頻出の意味公式とその割合を、表4から表7に示す。

まず、表4から表7を概観すると、《場面1》から《場面2》《場面3》《場面4》の全場面に共通して、応答の順序の第一に{詫び}が、第二に{理由}が来るパターンが顕著である。したがって、マレー文化圏における勧誘に対する断り行為の第一

表4 目上の親しい相手《場面1》

母語	応答の順序	割合(%) <sup>0</sup>	応答の最後	割合(%) <sup>1</sup>
ジャワ語			{理由}	24.2
(ジャワ語	{詫び}{理由}...	36.4)		
インドネシア語			{理由}	21.2
(インドネシア語	{詫び}{理由}...	18.2)		
マレーシア語	{詫び}{理由}	14.7	{理由}	26.4
(マレーシア語	{詫び}{理由}...	45.6)		

表5 目上の疎遠な相手《場面2》

母語	応答の順序	割合(%)	応答の最後	割合(%)
ジャワ語	{詫び}{理由}	9.1	{理由}	30.3
(ジャワ語	{詫び}{理由}...	15.2)		
インドネシア語	{詫び}{理由}	6.1	{詫び}	21.2
(インドネシア語	{詫び}{理由}...	30.3)		
マレーシア語	{詫び}{理由}	11.8	{理由}	27.9
(マレーシア語	{詫び}{理由}...	27.9)		

表6 同等の親しい相手《場面3》

母語	応答の順序	割合(%)	応答の最後	割合(%)
ジャワ語	{詫び}{理由}	18.2	{理由}	51.5
(ジャワ語	{詫び}{理由}...	39.4)		
インドネシア語	{詫び}{理由}	18.2	{理由}	45.5
(インドネシア語	{詫び}{理由}...	30.3)		
マレーシア語	{詫び}{理由}{理由}{関係維持}	22.1	{関係維持}	52.9
(マレーシア語	{詫び}{理由}...	50.0)		

表7 同等の疎遠な相手《場面4》

母語	応答の順序	割合(%)	応答の最後	割合(%)
ジャワ語	{詫び}{理由}	21.2	{理由}	51.5
(ジャワ語	{詫び}{理由}...	24.2)		
インドネシア語	{詫び}{理由}	9.1	{理由}	39.4
(インドネシア語	{詫び}{理由}...	27.3)		
マレーシア語	{詫び}{理由}{理由}	23.5	{理由}	42.6
(マレーシア語	{詫び}{理由}...	51.5)		

の特徴は、発話が{詫び}{理由}の順で始まることである。

次に、各場面の特徴を検討する。なお、意味公式の順序はそれぞれの意味公式の組み合わせなので、多数のパターンができるため、応答の順序が100%一致する組み合わせになる割合は必ずしも高くないことが報告されている(伊藤2002b; 2004b)。この点に配慮して、ジャワ語・インドネシア語を日本語と比較した伊藤(2005)は、中間言語用論の先行研究で使われている方法、すなわち意味公式の順序が100%一致する組み合わせの分析に加えて、出現率の高い{詫び}{理由}のパターンに他の意味公式が付加したパターンも同時に検討を行っているので、ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語を比較する本稿もこれに準拠することにする。表中の( )内が、最頻出パターンの後に他の意味公式が付加したパターンの、応答の順序と割合である。

表4に示されているように、《場面1》

目上の親しい相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンは、ジャワ語とインドネシア語は応答の順序が同じパターンの回答はなかったため、最頻出パターンはあり得ず、表4には応答の順序とその割合は記載しなかった( )とした。他方、マレーシア語は{詫び}{理由}で、その割合は14.7%であった。次に、{詫び}{理由}の後に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語で36.4%、インドネシア語で18.2%、マレーシア語で45.6%であった。最頻出パターンと、{詫び}{理由}の後に他の意味公式が付加したパターンの割合を合わせると、ジャワ語とインドネシア語のポイントは変わらないので36.4%、18.2%、マレーシア語は60.3%になる。応答の最後に来る意味公式はジャワ語もインドネシア語もマレーシア語も{理由}で、言語間の差はない。

表5に示されているように、《場面2》目上の疎遠な相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンは{詫び}{理由}であり、

ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の言語間に差はない。最頻出パタンの割合はジャワ語で9.1%、インドネシア語で6.1%、マレーシア語で11.8%であった。{詫び}{理由}パタンの後に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語で15.2%、インドネシア語で30.3%、マレーシア語で27.9%であった。最頻出パターンと、{詫び}{理由}の後に他の意味公式が付加したパタンの割合を合わせると、ジャワ語で24.3%、インドネシア語で36.4%、マレーシア語で39.7%になる。応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語とマレーシア語では{理由}が最多であるが、インドネシア語では{詫び}であり、言語間に差が見られる。

表6に示されているように、《場面3》同等の親しい相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンはジャワ語・インドネシア語はともに{詫び}{理由}で、マレーシア語は{詫び}{理由}{理由}{関係維持}である。最頻出パタンの割合はジャワ語とインドネシア語は各18.2%、マレーシア語で22.1%であった。{詫び}{理由}パタンの後に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語で39.4%、インドネシア語で30.3%、マレーシア語で50.0%であった。最頻出パターンと、{詫び}{理由}の後に他の意味公式が付加したパタンの割合を合わせると、ジャワ語で57.6%、インドネシア語で48.5%、マレーシア語で72.1%になり、その割合はインドネシア語では5割にわずかに届かないが、ジャワ語においては約6割、マレーシア語においては7割を超え、発話の典型的なパターンである。応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語とインドネシア語では{理由}、マレーシア語では{関係維持}である。

表7に示されているように、《場面4》同等の疎遠な相手に対する場合、応答の順序の最頻出パターンはジャワ語とインドネシア語が{詫び}{理由}、マレーシア語で{詫び}{理由}{理由}である。最頻出パタンの割合は、ジャワ語で21.2%、インドネシア語で9.1%、マレーシア語で23.5%と、その割合は同等の親しい相手に対する場合と大きい差はない。{詫び}{理由}パタンの後に他の意味公式が付加したパターンを見ると、ジャワ語で24.2%、インドネシア語で27.3%、マレーシア語で51.5%であった。最頻出パターンと、{詫び}{理由}の後に他の意味公式が付加したパタンの割合を合わせると、ジャワ語で45.4%、インドネシア語で36.4%、マレーシア語で75.0%になり、同等の等しい相手に対する場合より概ねポイントはやや低いものの、目上の親しい相手に対する場合・目上の疎遠な相手に対する場合よりかなり高い。応答の最後に来る意味公式は、目上の親しい相手に対する場合と同様に、ジャワ語もインドネシア語もマレーシア語も{理由}で、言語間の差は見られない。

最後に、4場面を包括して考察する。

応答の順序の最頻出パターンは、ジャワ語とインドネシア語は4場面すべて同じ結果であった。つまり、目上の親しい相手に対する場合は応答の順序は同じパタンの回答がなく、目上の疎遠な相手の場合・同等の親しい相手の場合・同等の疎遠な相手の場合はいずれも{詫び}{理由}であった。それに対して、マレーシア語は、目上の親しい相手の場合・目上の疎遠な相手の場合は{詫び}{理由}、同等の親しい相手の場合は{詫び}{理由}{理由}{関係維持}、同等の疎遠な相手の場合は{詫び}{理由}{理由}

であった。

応答の最後に来る意味公式は、ジャワ語はすべての相手に対して{理由}であり、インドネシア語は目上の疎遠な相手に対する{詫び}を除けば、目上の親しい相手・同等の親しい相手・同等の疎遠な相手に対して{理由}であった。他方、マレーシア語は同等の親しい相手に対しては{関係維持}、目上の親しい相手・目上の疎遠な相手・同等の疎遠な相手に対しては{理由}であった。

第2章第1項で述べたように、ポライトネス理論では、人間には2種類の基本的な欲求、ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスがあるとされている。前者は他人に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいというプラス方向への欲求であり、後者は他人に邪魔されたり、立ち入られたりしたくないというマイナス方向への欲求である(宇佐美2002)。

ここで、{理由}{詫び}{関係維持}の意味機能を確認したい。表3に示したように、{理由}は相手の意向に添えない旨の表明であり、{詫び}は相手の以降に添えないことを負担に感じている旨の表明であり、{関係維持}は相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけである。この3つの意味公式をポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの概念で分けると、{理由}と{詫び}は相手にそれ以上立ち入られたくない気持ちが表れている意味内容なので、どちらかと言えばネガティブ・ポライトネス、{関係維持}は「消極的」であっても相手との関係を維持するために自ら働きかけて理解を得ようとする意味内容なので、どちらかと言えばポジティブ・ポライトネス

だろう(伊藤 2005)。

このポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの概念を念頭に置いて、次に応答の最後に来る意味公式をポライトネス・ストラテジーの観点から検討する。発話を、すべての相手に対して{理由}で終えるジャワ語と、目上の疎遠な相手に対しては{詫び}で、それ以外の相手に対しては{理由}で終えるインドネシア語は、ともにネガティブ・ポライトネスが多用される言語だと言えよう。一方、マレーシア語は同等の親しい相手に対しては{関係維持}が使われ、それ以外の相手に対しては{理由}が使われるので、ネガティブ・ポライトネスを基調としながらもポジティブ・ポライトネスを志向する傾向が窺える。

橋元(1992)によれば、インドネシア語は相手の社会的地位の高低によってストラテジーの使い分けが行われるとある。ところが、本稿においては、応答の順序の最頻出パターンも応答の最後に来る意味公式も、ストラテジーの使い分けは、インドネシア語では認められず、マレーシア語では認められた。為政者により呼称が異なるとはいえ、言語学的にはインドネシア語もマレーシア語もマレー語であり、インドネシア人とマレーシア人は互いに隣国の国家語(Bahasa Negara)が理解できるほど、両言語の隔たりは小さいので、インドネシア語とマレーシア語で社会的地位の高低によってストラテジーの使い分けに差が出た理由は、残念ながら不明である。本稿は発話の順序に絞って分析を行ったので、収集したデータのうち、本稿が分析しなかった箇所にも、この理由を解き明かす鍵があるかもしれない。あるいは、Hofstede(1980; 1991)

の説くように<sup>12</sup>、言語文化における国家の要素を重視して、「インドネシアのジャワ語・インドネシア語」「マレーシアのマレーシア語」というように国家単位で捉えれば、ストラテジーの使い分けのメカニズムが解明される可能性がある。いずれにせよ、データに基づいた更なる調査・研究が待たれる。

### ・まとめと今後の課題

本稿は勧誘に対するジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の断り行為を、ポライトネスの観点から分析を行った。

分析の結果、応答の順序の最頻出パターンは、ジャワ語とインドネシア語では4場面すべてで{詫び}{理由}であった。それに対して、マレーシア語は目上の相手に対しては{詫び}{理由}、同等の親しい相手に対しては{詫び}{理由}{関係維持}、同等の疎遠な相手に対しては{詫び}{理由}{理由}であった。

応答の最後に来る意味公式に関しては、ジャワ語はネガティブ・ポライトネス、インドネシア語もネガティブ・ポライトネスであったが、マレーシア語はネガティブ・ポライトネスとポジティブ・ポライトネスの両方が使われた。

言語学の範疇でマレー語に属すインドネシア語は、ポライトネス・ストラテジーもジャワ語より同じマレー語であるマレーシア語に近いと考えられるが、本稿のデータでは、むしろインドネシア人とマレーシア人でポライトネス・ストラテジーに差があることが見出された。

ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語におけるポライトネス・ストラテジーの使い分けが、本稿が分析対象としたデータ

以外でも同じように現れるか、今後も探求を続けていきたい。

### 謝辞

本研究推進に際して、ディポネゴロ大学法学部のSoekotjo Hardiwinoto先生とアセアン学生協会の学生の方々、マラヤ大学日本留学予備教育課程日本語科の飯塚達雄先生をはじめとするクラス担任の先生方と日本留学予備教育課程の学生の方々、名古屋大学留学生センター日本語・日本文化研修コースの修了生Dewi Marfuahさんとディディック・メルハディさん、岐阜経済大学の卒業生ウオン・ユーベンさん、鳥羽商船高等専門学校の卒業生Mohd Zafran bin Md ZahirさんとHazizi bin Husseinさんに、ご協力をいただきました。心から、感謝を申し上げます。

### 注

1. マレー文化圏はマレー語 (Bahasa Melayu) が公用語として話されている地域を指し、マレーシア連邦・インドネシア共和国・ブルネイ王国・シンガポール共和国の一角に及ぶ (伊藤2004a)。
2. マレー語は、国家統合の観点から、インドネシア共和国においてはインドネシア語 (Bahasa Indonesia) と法定され (インドネシア共和国憲法第36条)、マレーシア連邦においては憲法でマレー語と記されているにもかかわらず一般にマレーシア語 (Bahasa Malaysia) と呼ばれている (小野沢1997; 鳥居1998)。詳細は、伊藤 (2004a) を参照されたい。
3. 比較文化語用論では、発話の分析は順序・頻度・内容の観点から行う。二言語比較の場合は、一本の論考で三つの観点から論じられることが一般的なようである。多言語比較では、分析結果の内、

特に顕著な特徴だけが記述されたり、字数制限が比較的緩い雑誌の場合、上記の三観点から分析が行われていたりするように見受けられる。本稿は三言語の詳細な比較を目的としているので、論点が拡散する恐れがあり、順序の分析に限定することにした。

4. 中間言語語用論とは、非母語話者の言語行動の発達とストラテジー使用について研究する分野である (Kasper & Schmidt 1996)。
5. 「丁寧さ」と訳される場合もあるが、体系としての敬語と混同されることを防ぐために、最近は片仮名で表記されているので、本稿も片仮名表記とする。
6. positiveに「積極的」、negativeに「消極的」と訳語を当てた翻訳書も見受けられるが (『外国語教育学大辞典』1999など) 漢字で表記することによって本来の定義が不明確になりかねないので、本稿では片仮名表記とする。同様に、faceも片仮名表記とする。
7. 授業を担当していない教師を指す。学生にとって、担任の先生に比べると担当以外の先生は社会的な距離があって疎遠な関係にある。
8. DCTは、話し言葉を書かせる不自然さが欠点として時々指摘されるが、自然発話の観察やロールプレイに比べて、変数のコントロールが効果的なこと、データを一度に多量に収集できること、言語間のストラテジーの比較に有効なことから、当該分野で広く採用されている現実がある。また、自然発話の観察とDCTを比較した方法論の研究では、断り行為の典型的な例はDCTから採取できると報告されている (Beebe & Cummings 1996: 80-81)。さらに、6種類のデータ収集の方法を統計的に検討した研究では、DCTはデータの信頼性がかなり高く、発話の収集手段として有効であることが示されてもいる (Yamashita 1996: 77)。
9. 断り行為を実現するかどうかを話者本人が明言し

ていない内容である。

10. 有効回答で一番多かった意味公式のボタンを、各言語の有効回答数で除した。
11. 有効回答で一番多かった応答の最後に来る意味公式を、各言語の有効回答数で除した。
12. 国家と社会は等しくないので、厳密に言えば、人々に共通する文化の概念は国家より社会に当てはまるが (Hofstede, 1991: 12)、Hofstede (1980; 1991) の文化理論では、国家は国民のメンタル・プログラム (mental program) のかなりの部分の源であるとされている (Hofstede, 1991: 12)。メンタル・プログラムとは、一般的には (広義の) 「文化 (culture)」と呼ばれているものである (Hofstede, 1991: 4)。

## 参考文献

- Beebe, L. M., & Cummings, M. C. 1996. Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In S. M. Gass, & J. Neu (Eds.), *Speech Acts across Cultures*, 65-86. New York: Mouton de Gruyter.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. 1990. Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen, & S. D. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*, 55-73. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S., & Olshtain, E. 1984. Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5: 196-213.
- Brown, P., & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤森弘子. 1994. 「日本語学習者に見られるプラグマ

## マレー文化圏における断り表現の比較

- ティック・トランスファー：『断り』行為の場合』『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1：1-19.
- 橋元良明. 1992. 「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』11(12)：92-101.
- Hofstede, G. 1980. *Culture's Consequences: International Differences in Work-related Values*. Beverly Hills, California: Sage Publications.
- Hofstede, G. 1991. *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. New York: McGraw-Hill.
- 生駒知子・志村明彦. 1993. 「英語から日本語へのブラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79: 41-52.
- 伊藤恵美子. 2001a. 「ポライトネス理論の実証的考察：心理的負担の度合を中心に意味公式の数値の観点から」『日本語教育論集』17: 1-20.
- 伊藤恵美子. 2001b. 「マレーシア政府派遣留学生の対人コミュニケーション障害：言語行動を面接から分析して」『異文化コミュニケーション研究』4: 57-70.
- 伊藤恵美子. 2002a. 「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について：勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系プミプトラのポライトネス」『日本語教育』115: 61-70.
- 伊藤恵美子. 2002b. 「マレー語母語話者の中間言語に見られる語用的特徴：断り表現における普遍性と特殊性」『ことばの科学』15: 179-195.
- 伊藤恵美子. 2003a. 「なぜマレー語母語話者は断らないのか？：アンケート調査とフォローアップ・インタビューから分析して」『ことばと人間』4: 49-59.
- 伊藤恵美子. 2003b. 「勧誘行為に対する断り方の選択をめぐって：『マレー・ジレンマ』の検証」『言語文化学会論集』21: 75-84.
- 伊藤恵美子. 2004a. 「マレー語母語話者のポライトネスの諸相：勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から」名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻 博士論文(未公刊).
- 伊藤恵美子. 2004b. 「マレー語母語話者の断り表現における語用的特徴：依頼行為に対する返答を主に検討して」『ククロス：国際コミュニケーション論集』1: 1-16.
- 伊藤恵美子. 2004c. 「断り場面で認められたジャワ語・インドネシア語の表現：Hofstedeの指標から解釈して」『東アジア言語研究』7: 19-29.
- 伊藤恵美子. 2005. 「勧誘に対するジャワ語・インドネシア語の断り行為：発話の順序に注目して」『ククロス：国際コミュニケーション論集』2: (印刷中).
- ジョンソン K・ジョンソン H. 岡秀夫(監訳). 1999. 『外国語教育学大辞典』大修館書店.(Johnson, K., & Johnson, H. 1998. *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics: A Handbook for Language Teaching*. Oxford: Blackwell Publishers.)
- Kasper, G., & Schmidt, R. 1996. Developmental issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, 18: 149-169.
- 熊井浩子. 1992. 「留学生に見られる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11(12)：72-80.
- Niikura, R. 1999. The psychological process underlying Japanese assertive behavior: Comparison of Japanese with Americans, Malaysians and Filipinos. *International Journal of Intercultural Relations*, 23(1)：47-76.
- 小野沢純. 1997. 「マレーシアの言語と文化」小野沢純(編著)『ASEANの言語と文化』高文堂出版社 167-195.
- 崎山理. 1974. 「ジャバ語の敬語」林四郎・南不二男(編)『敬語講座 8 世界の敬語』明治書院94-120.
- 笹川洋子. 1994. 「異文化間に見られる『丁寧さのルール』の比較」『異文化間教育』8: 44-58.

- 鳥居高. 1998. 「マハティールの国家・国民思想：特集にあたって」『アジア経済』39(5): 2-18.
- 宇佐美まゆみ. 2001. 「談話のポライトネス：ポライトネスの談話理論構想」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書』9-58.
- 宇佐美まゆみ. 2002. 「相対的ポライトネスを捉える『ディスコース・ポライトネス理論』と言語教育」日本言語文化教育学会定例シンポジウム「ディスコース・ポライトネスと『待遇コミュニケーション』教育」資料.
- Yamashita, S. O. 1996. *Six Measures of JSL Pragmatics*. Honolulu: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.
- 任炫樹. 2004. 「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6(2): 27-43.
- <http://www.dfa-deplu.go.id/background/republic.html> (「インドネシア共和国憲法第36条」について 2003年5月6日参照)